

## 論文

## 四国地方の森林組合における「山の神」祭行事の現状について\*1

西川希一\*2・奥山洋一郎\*2・枚田邦宏\*2

西川希一・奥山洋一郎・枚田邦宏：四国地方の森林組合における「山の神」祭行事の現状について 九州森林研究 75：17－21，2022

本研究の目的は、先行研究によって調査がなされておらず、かつ、九州地方と近畿・中国地方の「山の神」祭行事の様式の習合がみられる四国地方の森林組合を対象に調査を行い、その祭事の現状を明らかにすることである。本研究では、四国地方に存在している52森林組合、4森林組合連合会を対象にアンケート調査を行い分析した。その結果、①22森林組合に祭行事があること、②祭行事の開催日は九州地方の特徴がみられるものの、組合によって差異が大きく地域としてのまとまりを見ることはできないこと、③12森林組合で山のもの・海のものを併せて供えていること、④20森林組合で安全祈願の対象であること、⑤山の神に明瞭な具体像はないことが明らかになった。

キーワード：林業、山の神、森林組合、伝統文化

## I. 背景・目的

柳田（1909）が『後狩詞記』の序文にて、「實の所私はまだ山の神とは如何なる神であるかを知らないのである」と、山の神のことに触れてからのち、主に民俗学の分野において山の神に関する調査・研究が盛んに行われてきた。例えば堀田（1966）は、山の神とオコゼに関する問題を扱いつつ、当時の「山の神」祭行事の地域的な特徴を記録している。一方で、ナウマン（1963）は、山の神信仰には狩猟文化と農耕文化の2つの要素を持つことを認めつつ、それぞれの信仰は習合しており、信仰者の生活様式が山一里に向かうにつれて、より複雑な習合を果たしているのではないかと考察している。

現代においては、生活を山に依存する必要はなくなり、かつてあったような山と一体となった生活様式はほとんど見られなくなった。それに加えて、木材供給の役割も山村から離れており、かつてと同じような信仰が現代にも生きているとは考えにくい。しかし、林業で素材生産業を営む事業者では、いまでもしばしば「山の神」に関する祭行事をおこなっていることが柳田（2016 a, 2016 b, 2016 c）や西川（2021 b）の森林組合への調査によって明らかになっている。

四国地方の「山の神」に関する先行研究として、松田（2014）の石屋を対象としたものなどがみられるが、森林・林業を対象に調査を行ったものは確認できていない。

そこで本研究では、九州地方の「山の神」祭行事の様式と近畿・中国地方の「山の神」祭行事の様式の習合がみられる（松田, 2014）四国地方の森林組合を対象に調査を行い、「山の神」祭行事の現状を明らかにすることを目的とする。

## II. 調査方法

調査は、四国地方に存在する森林組合及び森林組合連合会、計

56カ所を対象にした。その内訳は、香川県が8組合、徳島県が10組合、高知県が24組合、愛媛県が14組合の計56組合・連合会である。森林組合での祭行事の内容、山の神の特徴を明らかにするための質問紙調査（表-1）を実施した。回答は、各森林組合よりメール・FAXもしくは電話インタビューで得た。本研究では、全国の大学演習林・九州地方の森林組合を対象にした西川（2021 a；2021 b）と同じ調査項目について調査を行ない、同じ順番で分析した。

また、事例研究として、2021年11月4日に物部森林組合で行われた「山の神」祭行事について現地調査を行った。

表-1. アンケートによる聞き取り質問項目

1.	祭行事の概要
1.1	祭行事の有無
1.2	祭行事の呼称
1.3	祭行事の開催時期
1.4	祭行事を始めた時期
2.	祭行事の内容
2.1	当日の勤務状況
2.2	供え物
2.3	祭行事の参加規模
2.4	禁忌
2.5	祭行事を行う目的
2.6	ご神体の有無
3.	山の神の特徴
3.1	山の神の名称
3.2	山の神の性別
3.3	山の神の遣い

\*1 Nishikawa, K., Okuyama, Y. and Hirata, K. : Current status of "Yama-no-Kami" rituals of Shikoku

\*2 鹿児島大学農学部 Fac. Agric., Kagoshima Univ., Kagoshima, 890-0065, Japan

## Ⅲ. 調査結果

## 1. 祭行事の概要

## 1.1 祭行事の有無

祭行事の有無について、すべての調査対象から回答を得た。22の森林組合で「山の神」祭行事を行っているとの回答を得た。県別の内訳は、香川県が0組合（0%）、徳島県が2組合（20%）、高知県が15組合（63%）、愛媛県が5組合（36%）であった。四国での「山の神」祭行事の開催率は約4割であり、県ごとに開催率に顕著に差があった。

## 1.2 祭行事の呼称

祭行事の呼称について、「山の神」祭行事を開催していると回答した22組合のうち（以下22組合）、21組合から回答を得た（設問回答率95%）。得られた回答を、「山祭り」、「山の神」、「安全祈願祭」、「その他」の4グループに分類すると、表-2のとおりであった。

表-2. 祭行事の呼称

	（組合数）			
	山祭り	山の神	安全祈願祭 <sup>*1</sup>	その他
徳島県			2	
高知県	2	3	6	3
愛媛県		3	2	

※1 「安全」の語が含まれる。

呼称は「安全祈願祭」が最も多く（10組合）、次いで「山の神」であった（6組合）。「その他」と回答した3組合からはそれぞれ、「山の日」、「お詣り」、「安全大会の際に一緒に行く神事」であり、名前はない」という回答を得た。

## 1.3 開催時期

祭行事の開催時期について、22組合のうち、20組合から回答を得た（設問回答率91%）。

表-3. 祭行事の開催月

	（組合数）			
	1月	7月	1,5,9月	その他
徳島県	1			1
高知県	1	2	2	8
愛媛県	3		2	

祭行事の開催月の結果については、表-3のとおりであった。開催月は「1月」が最も多く（5組合）、次いで「1、5、9月の年に3回行う」という回答であった（4組合）。このうち、高知県の1組合から「旧暦で開催している」との回答を得た。「その他」に分類した組合からは以下の回答を得た。徳島県の組合からは「梅雨明け」、高知県の組合では、2組合から「不定期」、それぞれ1組合ずつから「1、3、5月」、「旧暦5月」、「旧暦5、9月」、「6、12月」、「春と秋」、「秋（10～11月）」という回答を得た。

表-4. 祭行事の開催日

	（組合数）			
	4日	9日	10日	20日
徳島県			1	
高知県			1	6
愛媛県	1	4		

祭行事の開催日の結果については、表-4の通りであった。開催日は20日が最も多く（6組合）、次いで9日が多かった（4組合）。開催日にも地域での偏りがあり、高知では20日が多く、愛媛では9日が多かった。開催月と同じく、「中旬」などの回答も多くあった。

## 1.4 始めた時期

祭行事を始めた時期について、22組合のうち、20組合から回答を得た（設問回答率91%）。3組合から「設立当初から行っている」、3組合から「合併後は行っているが、それ以前のことは分からない」、12組合から「不明」、「昔から行っているが、いつからかは分からない」との回答を得た。高知県の1組合から、「10年ほど前に安全祈願や職員の親睦のために始めた」との回答を得た。また、高知の1組合から、「平成24年までは森林管理署の行っていた行事に参加していたが、管理署がしなくなってから組合独自に行うようになった」との回答を得た。

## 2. 祭行事の内容

## 2.1 当日の職務

祭行事当日の職務について、22組合のうち、20組合から回答を得た（設問回答率91%）。7組合から「当日は仕事をしない」、6組合から「山での伐採作業は行わない」、「事務作業のみ」、ほかの6組合から「祭行事後は通常業務」、「業務の終わりに行う」という回答を得た。「当日には仕事をしない」と回答を得た1組合からは、「日帰りで大山祇神社へ行く」との回答を得た。また、祭行事の呼称が「安全祈願祭」に分類されていた組合では、安全講習会や技術指導会が開催されていた。

## 2.2 供え物

祭行事の際の供え物について、22組合のうち、20組合から回答を得た（設問回答率91%）。愛媛県の2組合からは、「神事は行わないため、供え物などは準備しない」との回答を得た。また、高知県の2組合から、「供え物は神社が準備するため、品目などは分からない」との回答であった。多くの組合で見られた品目は「酒、魚、野菜」であり、14組合で「酒を供える」、12組合で「海のもの、山のものを一緒に供える」との回答を得た。組合によって品目数には差異があり、2、3品目の組合から10を超える品目を用意する組合まで様々であった。

## 2.3 参加規模

祭行事の規模について、22組合のうち、20組合から回答を得た（設問回答率91%）。関係事業体などを招き、150人を超える規模で執り行う組合から、作業班のみで行う組合まで、様々であった。11組合で「神官を招く」、「神社へお参りに行く」とのことであった。また、高知県の2組合で「いざなぎ流<sup>i</sup>の太夫を招く」という回答を得た。

## 2.4 禁忌

祭行事の禁忌について、22組合のうち、20組合から回答を得た（複数回答アリ）（設問回答率91%）。7組合で「特になし」との回答を得た。3組合で「喪中の人は参加しない」、2組合で「女性は参加禁止」との回答を得た。2組合から「山に入らない」、5組合で「木を伐らない」、「山のものに触れない」との回答を得た。また、2組合から「言い出したらきりが無いが、どれくらい信じるかは個人による」、「色々聞いてはいるが、昔ほど気にしている人はいない」という回答を得た。

## 2.5 目的

祭行事を行う目的について、22組合のうち、20組合から回答を得た（複数回答アリ）（設問回答率91%）。16組合で「安全祈願」という回答を得た。また、「組合の発展」、「五穀豊穡」、「周辺の山の鎮め」、「気構えとして」、「山の恵みへの感謝」との回答をそれぞれ1組合から得た。また、1組合では「理由はない、慣習として」、他の1組合から「しなくてもいいと思っているが、現場には信心深い人もいるため、するならそれでもいい、という感じ」との回答を得た。

## 2.6 ご神体

ご神体について、22組合のうち、20組合から回答を得た（設問回答率91%）。11組合から「なし」という回答を得た。4組合から「神棚はある」、ほかの4組合から「お札をもらうのでそれを飾っている」という回答を得た。1組合では、「祠がある」とのことであった。

## 3. 山の神の特徴

### 3.1 山の神の名前

山の神の名前について、22組合のうち、20組合から回答を得た（設問回答率91%）。18組合から「なし」、「分からない」という回答を得た。1組合から「オオヤマツミノカミ」、ほかの1組合から「組合全体で呼んでいるかは分からないが、山神様と呼んでいる」という回答を得た。

### 3.2 山の神の性別

山の神の性別について、22組合のうち、20組合から回答を得た（設問回答率91%）。11組合で「分からない」、「なし」との回答を得た。9組合で「女性である」という回答を得た。その他の特徴として3組合から「醜い容姿をしている」、1組合から「嫉妬深い性格をしている」という回答を得た。また、前項で山の神の名前を「オオヤマツミノカミ<sup>ii</sup>」としながら、山の神の性別は「女性格である」と回答した組合が1つ存在した。

### 3.3 山の神の遣い

山の神の遣いについて、22組合のうち、20組合から回答を得た（設問回答率91%）。18組合で「なし」、「分からない」という回答を得た。1組合で「イノシシ」、他の1組合で「芝天狗<sup>iii</sup>」という回答を得た。

## IV. 物部森林組合での事例

### 1. 物部森林組合と物部について

物部森林組合は、高知県香美市物部町に位置する森林組合であり、4つの作業班と原木市場を所有している。この物部という土地は、土佐で独自発展した民間信仰「いざなぎ流」が盛んな場所

であり、民俗学的にも非常に有名な地域である。現在でも「太夫」と呼ばれる人々によって伝承されており、様々な祈祷や例祭が執り行われている。物部森林組合の「山の神」も、このいざなぎ流に則って太夫のもと執り行われており、他の地域の「山の神」祭行事とは一線を画する様式をとっている。

### 2. 結果

調査は2021年11月4日に行った。物部森林組合では組合全体での「山の神」祭行事は行っておらず、4つの作業班がそれぞれ事業を始める前に、該当する林地の内部もしくは境界にて太夫を招き、「山の神」を行い、「おみくじ<sup>iv</sup>」によって許しが下りたのちに事業を開始する。すべての事業地で「山の神」を行うのではなく、「神様のいる所、昔から祀っていた場所」でのみ行う。

今回調査をした「山の神」は、作業道脇にて朝から行われた。当日に太夫とともに現場に赴き、太夫と作業員とで祭壇や弊などを準備した。

棚は2段のものを拵えた。しかし、地面を1階と数え、3階の棚として用いた。1階の供え物は辺りの精霊などに対するものであり、2、3階の供え物は山の神に対するものであった。今回の品目12種であり、2階にお菓子、果物、塩水、野菜類を、3階に昆布、魚、水、洗い米、餅、塩、日本酒、寒天を供えた（写真-1）。野菜や果物などは季節のものを供え、野菜は根や葉のついたものが好ましくとされた。魚はお頭、特に目がついていればなんでもよいが、許しが下りなさそうな事業地では、山の神が喜ぶとされる「オコゼ」を用いるようであった。オコゼを喜ぶ理由は、「山の神は女性で容姿が醜く、そのため自分よりもさらに容姿に劣るものを喜ぶ」という言い伝えによるものであった。棚に立てかけて置いてある竹筒にはいずれも日本酒が入っており、これは山の神とともに祀る水神様用の供え物であった。この竹筒は、祭事の終了後、川など水のある場所へ持っていき、残置した。これは川の神に対するお供えの意味があるのだという。

太夫に対して米が一升二合渡された。これは太夫の取り分とされており、一年が12ヶ月であることからこの量であるようであった。太夫は受け取った米を持ってきていた布の袋に入れ、そこに作った弊を立てていった。今回用意した弊は8本であり、うち7本は棚の後ろに立てられた（写真-2）。弊は山の神や水神等、祀るものによって形状が異なっており、事業地によって用いる弊の数は変わるとのことであった。

棚は前日までにほかの山から採ってきたものを、当日現場で太夫によって弊がつけられ、玉串として用いられた。そのほかに、棚の前側の柱に一本ずつ結びつけたほか、棚の後ろに一本突き立てられ、鏡や弊などがつけられ神籬として用いられた。

棚の前に太夫が座るゴザを敷き、その背後に作業員が座るビニールシートが敷かれた。

祭事は、準備が終わると直ぐに始められ、太夫は棚に向かい、作業員は後ろで待機していた。祭事の間、作業員たちは特に禁止されていることはなく、周辺にいれば何をしてもいいとされており、今回も煙草を呑んだり、現場を見ながら索をどのように張るかを話し合っていた。太夫は天津祝詞や大祓詞、六根清浄大祓詞をはじめとする様々な祝詞を奏上した。一種類の祝詞につき、数回繰り返し奏上した。数十分の祝詞奏上ののちに、数珠を用いた「おみくじ」を行った（写真-3）。

今回の「山の神」では、一回でおりたため、繰り返す様子は記録することができなかった。おりた後は、太夫の取り分として渡された米を少量左手にとり、1階の供え物と弊の間に3回、供え物の前に2回撒き、のちに2階に供えていた塩水に櫛を浸し、棚に対して振りかけた後、背面の作業員に対しても同様のことを行った。その際は、作業員は私語を止め、頭を垂れていた。その後、太夫によって書かれた祝詞が奏上され、作業員による玉串奉奠が行われ、祭事は終了した。

## V. まとめ

四国地方では、県によって「山の神」祭行事の開催状況におおきな差異があった。香川県では「山の神」祭行事が全く行われていないのに対して、高知県では開催割合が高かった（15/24）。西川（2021 b）が行った九州での調査では、福岡、佐賀、長崎の組合で開催割合が低いことが明らかになっている。これらのことから、それぞれの県・地域の「山の神」祭行事の開催の有無には、過去から現在に至るまでの林業の隆盛が関わっていることが示唆される。実際、令和2年木材統計の「国産材の樹種別素材生産量」によると、九州地方においては福岡、佐賀、長崎の木材生産量は20万m<sup>3</sup>を下回っており、大分、熊本、宮崎、鹿児島と大きな開きがある。四国地方においても香川が8000m<sup>3</sup>であり、ほか三県の生産量と大きな差が存在している。

開催日については、県を境界にして祭日が異なっていることが多かった。堀田（1966）は、「山の神」の祭日を12日とする列島「東北部」と7日と9日とする「中央部」、そして、15日や19日とする「九州四国」とに大別している。今回の結果は、20日を祭日のずれとして許容するのであれば、四国地方の森林組合が中央部と九州四国、双方の影響を受けているととらえることができる。一方で、「20日」は高知県でのみ回答されていること、柳田（2016 c）が行った関東から中国地方の全数調査では「20日」と回答した組合が存在しないことから、他の特別な理由が存在することも示唆される。

開催月については、1月と1・5・9月に行われることが多かった。堀田（1966）は、肥後・薩摩の「山の神」が正月・5月・9月の16日に行われることが多いことから、「年に三回という形も九州の一つの特色」としている。九州での研究では、正月・5月・9月に「山の神」を行う森林組合が熊本・鹿児島で顕著に多く、九州全体でも確認できること、大分で「1月」の回答が顕著に多いことから、四国の森林組合が九州の影響を受けていることは明らかであり、海を隔てて隣県である大分、愛媛で「1月」という回答が多いことも、互いに影響しあったためだと考えられる。

本研究では、四国地方の森林組合における「山の神」祭行事の現状について調査・考察を行った。しかし、民俗学により記録されてきた「山の神」祭行事と、現在林業事業者などで行われている「山の神」祭行事との関係性について、確かなことは分かっていない。そのため、今後も全国での調査を進め、現代における「山の神」祭行事の様式を記録するとともに、地域ごとの特徴、時代の変容による「山の神」祭行事への影響などを考察していきたいと考える。

また、今後の研究課題として、西川（2021 b）での調査の際、

本研究の調査の際にも度々言われたこととして、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響がある。新型コロナウイルス感染症の影響で「山の神」祭行事を自粛している組合が多く存在しており、その流行の前後で、「山の神」祭行事の実施状況や様式が大きく変化している可能性もある。それ以前に、全国の「山の神」祭行事の現状を把握しておく必要があると考える。



写真-1. 棚と供え物



写真-2. 弊



写真-3. おみくじの様子

## 引用文献

- 堀田吉雄 (1966) 山の神信仰の研究, 390 pp, 伊勢民俗学会  
 金田久璋 (1998) 森の神々と民俗, 301 pp, 白水社, 東京  
 松田陸彦 (2014) 石屋の祀る山の神・再考 祭祀の実態と篤い信仰への疑問, 国立歴史民俗博物館研究報告第183集:187-207  
 ネリー ナウマン 著, 野村伸一・檜枝陽一郎 訳 (1994, 初出1963) 山の神, 464 pp, 言叢社, 東京  
 西川希一ほか (2021 a) 九州森林研究 74:9-12  
 西川希一ほか (2021 b) 九州地方の林業経営体における「山の神」祭行事の現状, 鹿児島大学農学部森林政策学研究室卒業

## 論文

- 農林水産省 (2021) URL: <https://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/mokuzai/index.html> (2022年1月8日利用)  
 柳田國男 (1909) 後狩詞記:日向国奈須の山村に於て今も行はるゝ猪狩の故実, 70 pp, 柳田國男  
 柳田邦玲雄ほか (2016 a) 日本森林学会大会学術講演集 127:113  
 柳田邦玲雄ほか (2016 b) 中部森林研究 64:73-76  
 柳田邦玲雄 (2016 c) 職能集団としての森林組合における山の神信仰の特徴と地域性 - 関東地方から中国地方に至る地域を対象として -, 東京農工大学自然環境保全学専攻森林利用システム学研究室修士論文

<sup>i</sup> いざなぎ流とは、土佐国で独自発展した、陰陽道・修験道・仏教・神道などが混雑した民間信仰であり、太夫とはいざなぎ流においてのさまざまな知識を習得・管理している宗教者のことを指す。  
<sup>ii</sup> 「オオヤマツミノカミ」とは、古事記や日本書紀においてあらわれる男神であり、それぞれ「大山津見神」、「大山祇神」と表記される。古事記では「伊邪那岐命」、「伊邪那美命」との間に生まれたとされ、日本書紀では「伊奘諾尊」が「軻遇突智(命)」を3(5)段に斬った際の一段が大山祇になったとされている。

<sup>iii</sup> 芝天狗とは、土佐などで語られる妖怪の類であり、頭に皿があり、通りかかった人に相撲を挑むなど、河童によく似た特徴を持っている。  
<sup>iv</sup> おみくじとは、神霊に対して意志を伺う行為のことであり、物部森林組合の場合では、その土地で事業を行っても良いか伺いを立てることになる。両手に数珠を持った状態で右手をおくり、左右の手の間の数珠の数を数えることで行われる。奇数であれば許可がおりた、と判じ、偶数であれば再度祝詞を奏上し、おりるまで何度も同じことを繰り返す。

(2021年11月14日受付;2022年1月11日受理)